

山梨県若者海外留学体験人材育成事業(大学生等コース)

県政の課題(テーマ)報告書

平成29年 8月 20日

山梨県知事 殿

本人氏名 足立幸太
留学先 シドニー工科大学
留学期間 2016年7月28日～2017年7月23日

研究の課題(テーマ)

山梨のおいしい水や豊かな水資源の魅力を、観光振興、交流人口の拡大、移住・定住の促進などにどう活かすのか。

提出内容

[概要]

1. 観光振興、交流人口の拡大、移住・定住の促進の現状
観光客数の推移
山梨の人口推移
移住・定住者の推移
2. 水資源の魅力と観光資源として使う際の問題点
山梨の水資源の魅力
1. ミネラルウォーター
2. 豊富な自然環境
問題点
1. 環境への配慮
2. 定住・移住へつながらない
3. 解決策
環境・地球に配慮したPR
育水
4. まとめ

添付書類

詳細について、図・表・写真などの資料も含めてA4縦版5枚以内にまとめて報告してください。

パソコン・ワープロの使用可(使用する文字は12ポイントとしてください。)

図・表・写真等を用いて可

[1. 観光振興、交流人口の拡大、移住・定住の促進の現状]

観光客数の推移

山梨県を訪れる観光客数は年々増加しており、平成27年には年間3,146万2千人もの人が訪れた(平成26年と比較して4.8%の増加、平成25年と比較して6.0%の増加。)。そのうちの38.9%の人が自然を楽しむために山梨を訪れている。手段としては車が多く7割以上を占めている。

山梨の人口推移

山梨県の総人口は、2000年の9月にピークを迎え、その後2002年から減少し始め、現在は約83万人であり、今後も減少していくと予測される。

移住・定住者の推移

県外の人には住みたい田舎ランキングで毎年上位に入るほど人気な山梨県だが、県内から県外へ出ていく人は少なくなく、特に若い世代の県外流出が問題となっている。

⇒ 県外からの観光客は増加するも、若い世代の流出が問題となっている。

[2. 水資源の魅力と観光資源として使う際の問題点]

山梨の水資源の魅力

1. ミネラルウォーター

山梨県のミネラルウォーターの年間出荷額は約412億円で全国シェアの29.3%を占めており、多くの日本国民が山梨県を「水がおいしい県」として認識していると言える。これは大きな魅力であり、上に述べたように、自然を求めて訪れる人の割合に現れている。

2. 豊富な自然環境

日本を代表する富士山だけでなく、良質な水を生み出している南アルプス山脈も有している山梨県。都心部からのアクセスが良いうえに自然の中でのアクティビティも楽しめる。

問題点

1. 環境への配慮

ミネラルウォーターは確かに全国的にも有名で、山梨の観光振興の一端を担っていると言える。しかし、ミネラルウォーターを多く出荷しているということは、それだけ多くのプラスチックを使用し、環境負荷を高めるだけでなく、地下水をくみ上げていることから、生活用水や工業用水に主に地下水を用いている山梨県の貴重な地下水資源を減少させることにも繋がる。つまり、ミネラルウォーターの出荷量が1位ということは、それだけ環境に配慮が足りないということを表しかねないということである。

また、車での観光客が多いということはそれだけ排気ガスなど自然に有害な物質が放出されることを意味する。電気自動車が利用しやすい環境であればいいが、山梨県は電気ステーションが広く普及しているとも言えず、問題となっている。

2. 定住・移住へつながらない

上にも述べたように、都心からのアクセスが良いため多くの観光客が訪れているが、多くの観光客は日帰りで観光していくことが多く、移住に繋がりにくくなっている。北杜市は移住者には人気で、山梨県内への移住者の7割を占めているものの、その反面、山梨の他の地域への移住者が増加しにくくなっているとも言える。

⇒ 魅力的なイメージや資源を有しているものの、環境への配慮と定住・移住者が増加しづらい現状が問題となっている。

[3. 解決策]

環境・地球に配慮した PR

・ 考え方

現在、山梨県は「おいしい水の県」として知られており、これは他県や海外に PR する際にメリットになると思われる。しかし、水がおいしいというだけでは限界があるように感じる。というのも、海外では地球に優しい商品や活動が広く受け入れられているからだ。例えば、海外からの観光客で、山梨にはおいしい水や富士山のような雄大な自然があるから行ってみようと思うとする。しかし、実際行って見ると、富士山にはゴミがたくさんあったり、雄大な山々を切り開いてリニアを通すということを知る。こういった経験からはまた来たいと思いにくくなるだろう。そのため、「おいしい水」が有名な山梨県はその水を守り続けていく必要があり、それを PR の方法にも反映させる必要があると言える。つまり、県全体として「おいしい水の県」としてではなく「環境に配慮した水利用を行っている県」として PR していく必要があると考えられる。そして、そうした活動を通して、初めて「水の聖地やまなし」として日本から、世界から認められると言えるだろう。

・ 具体案

水道水利用やマイボトルの促進、会議の際などの飲み物をペットボトルでないものにするなどし、それをホームページや SNS、パンフレットなどで発信していくことが有効的であると考えられる。

以下にいくつかの事例を挙げる。

・ 水 DO プロジェクト

「水 Do! (スイドウ)」は、ペットボトルなどの使い捨て飲料容器の使用を減らし、水道水の飲用、「水の域産域消」を推進することにより、環境負荷の低減と地域の水資源保全、人にやさしく潤いのあるまちづくりを促進するキャンペーンである。

このプロジェクト内で推奨している「街のオアシス」というものでは、街中に、気軽に利用できる水飲み場やマイボトルに給



水できる場所(公共施設やレストラン)を増やし、使い捨て容器の減少、さらに人にやさしく潤いのあるまちづくりにつなげるというものである。これは、単に給水所を増やすというだけでなく、観光客と地域を繋ぐ手段としても有効的であろう。ちなみに、山梨では甲府市丸の内にある「パールスロー」という喫茶店が賛同し、給水を無料で行っていた(現在は閉店)。

[詳細]：水 Do! (<http://sui-do.jp/>)

・奈良県生駒市のリユースびん入りお茶

平成 24 年 11 月に奈良県の生駒氏で開催された「環境首都創造 自治体全国フォーラム 2012」において、リユースびん入りのお茶を環境対策の一環として採用。それ以来、市が主催する会議やイベントでは、リユースびん入り飲料を採用することを原則化した。

これは奈良発のリユースびん入り大和茶だったため実現したとも言えるが、このように市や県が環境に配慮しているということを実現し、発信していくことが重要である。

[詳細]：リユースびん入り大和茶 To-Wa (<http://yamatocha-to-wa.com/>)



関連記事

(https://www.glass-3r.jp/consumer/index5_001.html)

育水

・考え方

この育水という考え方は、山梨を水の聖地にしていくうえで非常に重要な考え方になってくると言える。この育水には大まかに2つのアプローチの仕方があると考えられる。1つ目は県や市が水や森の大切さ実際に行っている活動とともに発信していくというもの。いくら山や水を保全しているといっても伝わらなければ意味がないので、新聞やテレビだけでなく SNS も有効になってくるであろう。2つ目は若い世代(特に小中高生)へのアプローチである。

こうした取り組みは時間がかかるが持続可能な水利用及び水の聖地を目指す上では欠かせない。また、育水という考えに基づき地域の交流も増えると考えられる。育水の中には、地域で水環境を守っていくという側面もあるため、そうした保全活動を通じ、地域のつながりも強くなるといえる。加えて、地域の若者がこういった活動に参加することにより、地域の一員としての意識が生まれ、それが結果的に定住につながると考えられる。

・具体案

県内の学校では、社会科や公民の授業等で山梨県の取り組みとして話したり、実際に社会科見学として森や川に行くのもいいだろう。県外の(特に東京や神奈川の)若い世代には自分たちの使っている水がどこから来ていて、どのようにその自然が守られているかを校外学習やNPO、市や県などの協力で行っていくのがいいと考えられる。

・「水源通行手形」を持って水源地へ遊びに行こう!

これは2016年に横浜市水道局が実施した事業で、自分たちが日ごろ使っている水源を実際に見てもらうことに加え、様々な場所で割引等の優待が受けられるようにしたもの。水源について学ぶだけでなく、宿泊や食事等を通して地域活性化も担っていると言える。こうした取り組みを継続していくことにより、県外の人にも山梨の自然や環境対策に関心を持ってもらうきっかけになるだろう。



[詳細]: 「水源通行手形」を持って水源地へ遊びに行こう!

(<http://www.city.yokohama.lg.jp/suidou/event/event-josui20160701.html>)

[4.まとめ]

山梨県には豊富な自然と水資源があり、これらは山梨の魅力となっている。この資産は観光振興や交流人口の拡大、定住・移住の促進を手助けする一端になることは明白である。しかし、美しい自然や水資源がある山梨県だからこそ、日本に、世界に、水資源の保全や環境保全を訴えていく義務を担っていると言える。今回の報告書で示した事例を含め、学生という立場だからこそできることもあると思うので、山梨が「水の聖地」として認められるよう今後も尽力していきたいと思う。